

めひの野



〒930-0143
富山県富山市西金屋6682番地
社会福祉法人めひの野園
TEL.076-436-0270
発行責任者 中田 匡
(表題書)
高岡市中川上町3の31
(故) 社浦 荻水先生



めひのオヤジ

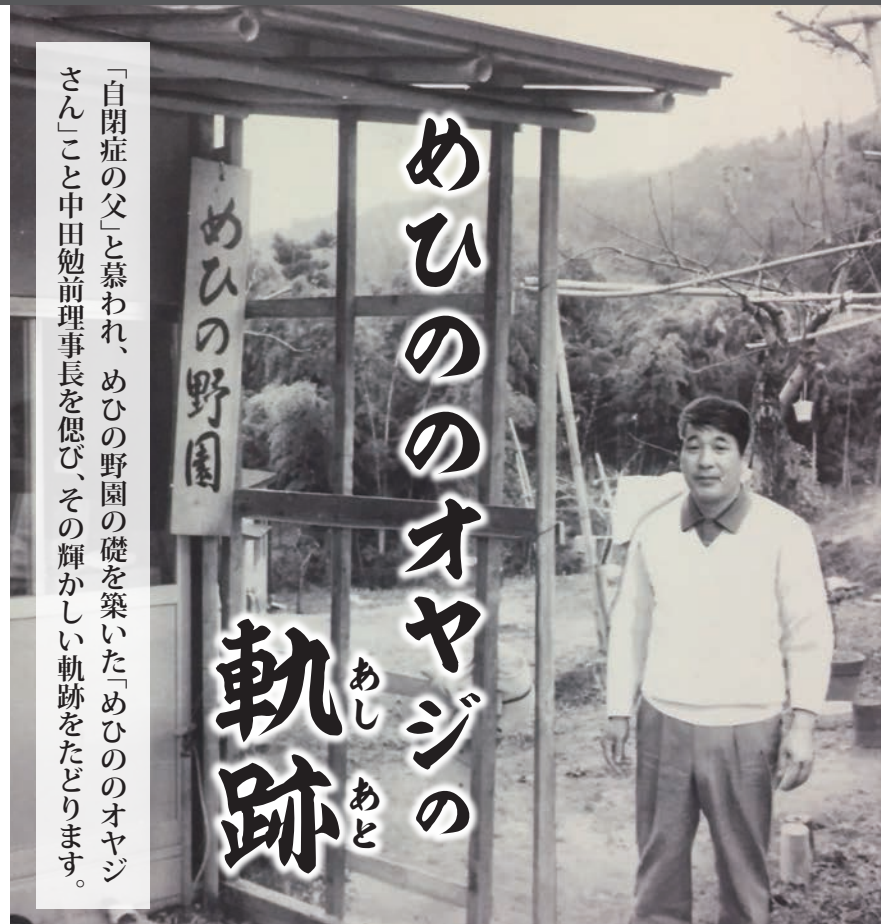
めひの野園理事長 中田 匡

本年一月九日(月)午後二時十五分、めひの野園創立者「中田勉」は、目の中に入れても痛くない程可愛がっていた孫、ひ孫二人に見守られ、入院先の病院で、八十七歳の生涯を閉じました。生前は、皆様方にひとかたならぬご厚誼にあずかり、故人になりにかわり心よりお礼を申し上げます。また、二月十日(金)に当園体育館にて挙行了しました「中田勉前理事長お別れの会」には、大勢の方々にご参会を頂き、重ねて厚くお礼を申し上げます。

私は、十六歳からの学生時代を、東京都町田市玉川学園にある学校法人玉川学園で過ごしました。その玉川学園の創立者であり、全人教育の提唱者であり、最後の私塾創立者で「玉川のオヤジ」である小原国芳先生を、故人は大変尊敬していました。私たち学生たちは皆先生を「オヤジさん」と呼んで親しんでいました。先生もこの呼び名を気に入って自分のことを「オヤジは…」と言っておられました。学生たちは先生を慕い、周囲に集まり、皆目を輝かせてその話に聞きいていました。いまにして思えば、まさにそれが真の教師の姿だったのだと思います。

故人は、自らの理想を、「玉川のオヤジ」の教えと重ね合わせ、障害者のオヤジ、「めひのオヤジ」として生きてきたのだと思います。最後になりましたが、「めひのオヤジ」が尊敬した「玉川のオヤジ」の玉川モットーを紹介して、皆さまへのご挨拶と変えさせていただきます。

「人生の最も苦しい いやな辛い損な場面を 真っ先に微笑を以って担当せよ」



在りし日の「めひののオヤジさん」こと中田勉前理事長。
めひの野園は、このプレハブ小屋から出発しました。

めひののオヤジの

軌跡

「自閉症の父」と慕われ、めひの野園の礎を築いた「めひののオヤジさん」こと中田勉前理事長を偲び、その輝かしい軌跡をたどります。

創設期 (1980年代)

「まだ手が差し伸べられていない人たちに、手を差し伸べる！」

オヤジさんが児童相談所で働いていた昭和50年代、自閉症の人たちはみな精神障害と見なされ、学校や施設、地域で行き場がない状況でした。相談を受けるうち、「彼らが安心して暮らしていくには、これまでにない『自閉症の支援に特化した施設』が必要だ」という思いに駆り立てられ、52歳で県職員を退職、その退職金を基に、無認可の通所事業所「めひの野園」を開設しました。

プレハブ小屋を建てたばかりのめひの野園には、「呉羽丘陵の一角に自閉症専門の施設ができたらしい」との噂を聞きつけた保護者とその子どもたちが訪れ、すぐに日中預かりが始まりました。当時はまだ自閉症の人たちへの支援については手探りの状況でしたが、これから始まる自閉症専門施設の活動に期待を寄せ、利用者と保護者、職員が手を取り合つてその道を切り開いて一步一步進みはじめました。

「職住分離」の実践

昭和57年に社会福祉法人の設立認可を受け、翌年にはうさか寮と雷鳥工房が建てられました。生活の場である寮だけではなく、同時に工房も作ったのは、オヤジさんに「職住分離」への強い思い入れがあったからです。

「生活の場」と「日中活動の場」をしつかり区別し、朝は「生活の場」から「日中活動の場」へ出かけ、終わったら帰るということ。このことが生活のリズムを整えることにつながります。自閉症の人たちにとってはこれが大切だとオヤジさんは考え、当時の日課は、午前中は「全身を開く」活動として山歩き、午後からは「掌を開く」活動として、雷鳥工房で造形活動（陶芸や籐細工、絵画、手芸など）に取り組むというものでした。



「掌を開く」活動として取り組んでいた造形活動



当時、居場所がなかった自閉症の人たちが次々と集まってきました。

また、専門の講師陣による「本物を見せてあげる指導」によって、彼らは視覚を通して学び、時間をかけながら素晴らしい才能を開花させていきました。「彼らは仕事を与えられないから何もできないのであつて、場所と仕事があれば、ちゃんといろいろなことができる人たちなんだ」というオヤジさんの強い信念の下、次々と作業棟が増えていったのです。

ついに体育館が完成！

昭和60年には、利用者、職員、保護者が待ち望んだ体育館が竣工しました。それまで、悪天候で山歩きができない日は、最寄りの体育館まで、職員の車を総動員して出かけるのが常でした。体育館の建設資金集めには、保護者の皆さんが県内中の企業を回っていただきました。多くの企業で門前払いに遭い、大変苦労されたこともあって、体育館が竣工した時は、「これで雨の日も雪の日も、ラジオ体操ができる！」とみんな大喜び。「天気は左右されることなく、思う存分走り回ってほしい」というオヤジさんの温かい想いがかった瞬間でした。



昭和60年、待望の体育館が竣工

みんなの余暇はここから始まった！ ～平湯山の家～

体育館が竣工した同年、岐阜県平湯温泉の近くに「平湯山の家」が建設されました。利用者を受け入れてくれる宿泊施設がほとんどなかった時代に、「宿泊による自立訓練の場所」として、オヤジさんが買い求めた土地に建てられた「平湯山の家」。ここでは露天風呂で水遊びをしたり、自然の中を散策したりと、人目を気にせず思う存分遊ぶことが出来ます。いつもと違う場所での宿泊に徐々に慣れていき、今では「一般のホテルを利用した旅行」がめひの野園の恒例行事になりました。



「平湯山の家」は僕らの別荘

ちよつと一息

来園者もすごいぞ めひの野園

～中曽根元首相来園～

うさか寮の増築工事中の昭和63年、中曽根康弘元首相の来園が実現しました。利用者が作った陶芸の抹茶碗が人づてに中曽根元首相の手に渡り、その豪快で人間味溢れる作品と共に、施設紹介のパンフレットに、園長の名前が無いことに興味を持たれたそうです。「パンフレットに園長の名を出していないのは奥ゆかしいことですね。偉い人ですよ。ぜひ一度お会いしたい」と。利用者の純粋な心が作った茶碗と、オヤジさんの人柄が結んだ不思議な縁でした。



昭和60年、首相官邸を訪問した際、中曽根元首相の「ぜひ園に寄りたい」との約束がついに実現

～三笠宮寛仁親王来園～

平成元年には「ひげの殿下」の愛称で親しまれた三笠宮寛仁親王が来園されました。うさか寮や作業風景を丁寧に視察され、翌日は護国神社で開催された「めひの野園チャリティ茶会」にも足を運ばれました。

オヤジさんは、「手織りのふくさ」を贈ることを思いつき、はたおり班はそのひと言で大忙し。京都から大きな織機を取り寄せ、絡まる糸と格闘しながらも、赤と紫の絹糸で織りあげた「ふくさ」が完成すると、「はたおりを始めて間もないめひの野園のはたおり班が、絹糸の作品を仕上げてしまうなんて！」と周囲の人は驚いたそうです。「どうせやるなら本物を」という、オヤジさんの繊細さと洞察力・大胆さ・豪快さが存分に発揮されたエピソードです。



作業場を一つひとつ見ていかれ、利用者に声をお掛けになりました

入所施設充実期

(1990年代)

「一人ひとりが輝ける場を！」

オヤジさんは常々「自己資金を自分たちで生み出していくために、利用者の働く場をどんどん作っていききたい」と話していました。その言葉の通り、それまで敷地内に建てられていたプレハブの作業場は、より本格的な作業場として生まれ変わっていきます。

現在、春の苑がある場所には「みしまの工房」が建てられ、1階では食品加工班、2階では籐細工班の作業が行われるようになりました。また、体育館では手芸班やたおり班、木工班の作業も始まり、入所者70名のために12もの作業班が作られました。

その後、平成6年に「ウオーム・ワークやぶなみ」が竣工、平成12年に「作業センターしじみが森」が開設、また、その翌年には「みしまの工房」が完成し、徐々に利用者の働く場が充実していきます。そのおかげで利用者には多種多様の作業が用意され、それぞれが好きなこと、得意なことを活かして活躍できるようになりました。



当時体育館2階で行われていた機織り作業。自分専用の機織り機を使い、立派な機織り職人として活躍しています

グループホームに込められた「地域との共生」への想い

平成元年のグループホームの制度化に伴い、めひの野園はいち早くグループホーム作りに取り掛かりました。「誰でも彼でも一まとめにして閉じ込めてしまつてはいけない。それぞれの特性に合わせ、やがては地域に溶け込んで生活できるようにしてやりたい」という想いがオヤジさんにはありました。しかし、当時は入居要件が厳しく、その対象者はごく一部に限られていました。さらに「富山県の県民性にグループホ



グループホームでのくつろぎのひと時。

ームは馴染まない」との理由で反対を受けていたのです。

当時、全国では昭和63年から福祉ホームが次々に建てられていました。その中で福祉ホームが建てられていない県は3県だけ。富山県はその一つでした。そこで、めひの野園に県から依頼があり、園の敷地内に「福祉ホーム」という形で群竹寮が開設されました。ここで訓練をしてから地域のグループホームへ移行する、という段階的な支援方法を試みたのです。これが功を奏し、平成3年には県内初のグループホーム「若月寮」を開設。その後も徐々にグループホームを増やしていきました。

ちょっと息
ちょー

別れを惜しんで…
寄せられた声

2月10日(金)に行われた「中田勉前理事長お別れの会」では、会場にメッセージを記入する場が設けられ、参加された皆さんから多くの声が寄せられました。ここでその一部を紹介します。

・大変お世話になりました。めひの野園に入園出来ていなかったら…。親子共々本当に途方に暮れていた事と思います。いつも優しいまなざしで子どもを見守ってくださいました。本当にありがとうございました。(保護者)

・中田先生、長い間お疲れさまでした。晴れ男の先生、(お別れ会当日)やっぱり晴れましたね。めひのは私の原点です。楽しい思い出、ちよつとつらい思い出もたくさんあります。本当にお世話になりました。(元職員)

・亡くなられたことを聞いた時、私はかなくて、つらくて泣いてしまいました。だっていつばい思い出があったからです。天国から見守ってください。私は仕事をがんばっていきます。(利用者)



別れを惜む声や感謝の声が多数寄せられました。

さらなる事業所の展開期

(2000年代)

「彼らにはこれしかない」 菌床椎茸栽培に着目！



天候に左右されず、安定した仕事がある事がふじなみの強み

「自閉症の人たちに雇用の場を」との思いからオヤジさんが着目したのは、北海道の「おしま菌床きのこセンター」で行われていた椎茸の一貫生産でした。かねてからオヤジさんは、「自閉症の人たちにとって大事なことは、①いつ②どこで③何を④どのように⑤どのくらい(量・時間)⑥どうすれば(いつ終わる)⑦終わったらどうする⑧終わったらどうなる、ということがワークシステムとして分かりやすく構築されていることである」と話していました。



平成17年に完成した「作業センターふじなみ」

また、「好きな事、出来る事、得意な事を整理してあげ、それを活かして仕事を創り出してあげることが大事」とも考えていました。椎茸の一貫生産には様々な作業工程があるため、まさに、利用者の得意なことや、出来ることを活かして作業ができる仕組みが整っていたのです。オヤジさんは、「これだー彼らにはこれしかない」と確信しました。

それから6年後の平成17年、めひの野園での椎茸生産は、様々な辛酸をなめながらも、長年の思いであった菌床椎茸一貫生産プラント工場「作業センターふじなみ」として完成を迎えたのです。

「やねのうえのガチョウ」 その名の由来は？



工房内では、それぞれが自分の仕事に一生懸命取り組んでいます

平成20年には「手づくりパン工房やねのうえのガチョウ」がオープン。「利用者が地域社会で働く第一歩に」、「これが地域の憩いの場になるように」という願いを込めての開設でした。

ところで、一風変わった「やねのうえのガチョウ」という店名。その由来についてオヤジさんは、当園広報誌の「お茶の間歳時記」のコーナーで、次のように記しています。

『アメリカのロックフェラー財団の創設者が八歳のとき自分が大切に飼育していた八羽の七面鳥が、クリスマス頃の頃に村人に是非にと所望され売られることを決心した。しかし、飛べない七面鳥が全部農作業小屋の屋



南フランスの風が感じられそうな「やねのうえのガチョウ」の外観

根の上に登って、あたかも売られることを拒否しているようでロックフェラー少年が大変戸惑ったという話が本に書いてあった。真偽の程は判らないが、ともかく売却したお金を基に次々と事業を展開し、アメリカ一の財閥になったということである。願わくば「小さな店舗であるが、ゆくゆくは大きな店へと発展し、売上を伸ばし、利用者の工賃倍増」にと願って命名したのである。』

店の佇まいは、オヤジさんが昭和40年代初めに南フランスのモンペリエで開催された「第一回国際精神薄弱者会議」に出席した際、パリから8時間バスに揺られながらも、海岸沿いの息を呑むような絶景に感動。とりわけ赤い屋根にクリーム色の壁の建物が印象深く心に残ったとのこと。「ぜひ南フランスの建物に似せてほしい」との思いで設計してもらったそうです。

我らが「めひののオヤジ」はやっぱりすごかった！

みんなで祝いした「藍綬褒章受章」、そして「30周年記念式典」

昭和56年当時、行き場のなかった自閉症児や不登校児のための施設作りを始めた頃、以前に関わっていた少年たちが訪ねて来るようになりました。その中には保護観察中の少年もいたことから、家庭裁判所とのつながりが生まれ、少年たちを園で受託するようになりしました。これらの長きにわたる功績が認められ、藍綬褒章受章という榮譽に浴することとなったのです。

最高裁判所講堂での授章式で長官から直接藍綬褒章を授かり、午後から皇居長和殿春秋の間で天皇陛下に拝謁。陛下に直接お声を掛けていただいたことに、とても感激したそうです。



平成19年に受章した藍綬褒章



藍綬褒章受章祝賀会で、職員みなでお祝いしました。

平成24年、めひの野園は30周年の節目を迎えました。記念式典で「30年前がつい先日のように…」で始まったオヤジさんの挨拶。苦労を重ねながらも、これまで自閉症の人たちを支えてきた温かな言葉が続きます。「とにかく利用者の働ける場を作ろう。障がいのある人でも給料をもらって、税金を納めるくらいにしてやりたい」という思いを肝に命じてこれまでやってきた。いろいろと大変なこともあったが、今では収益が上がる仕事もできるようになってきた。これからも実績を積んで、利用者の仕

事場を増やしていきたい。」と、それまでの30年を振り返るとともに、これまで園を支えてくださった方々への感謝の思いを述べました。



30周年記念式典で挨拶するオヤジさん

これまで人生をかけて自閉症の人たちへの支援に尽力してきたオヤジさんは、まさに「自閉症の父」です。

ある時「自閉症の人たちはありのままでもいいが」と語ったオヤジさん。「自閉症の人をどうにかしようとするのではなく、大事なものは心に歩み寄ってあげて、問題の原因を考えてあげること。変わる必要があるとすれば、それは周りの理解と環境なんだ」。オヤジさんとともに歩んだ思い出を胸に、これからは私達は「共に生きる」福祉の実現に向かって邁進していきます。オヤジさん。「いつまでも見守っていてください。」



30周年記念式典後、会場の富山国際会議場でオヤジさんを囲み、職員で記念撮影

耳をすませば

私たちは、オヤジさんから、生前たくさん温かい言葉をかけていただきました。

ある時は全体職員研修会で、ある時はお酒の席で、そしてある時は何気ない日常の中で…。

ここでは、平成18年7月にオヤジさんが、母校である日本社会事業大学の学報「たけおか」(55号)に寄稿された文章を紹介します。



いつも優しく話しかけてくれたオヤジさん。この時は何をお話されたのでしょうか。

この文章には、生前お話になっていた、めひの野園を設立するきっかけとなった北欧旅行や、設立に至るまでの苦労、自閉症の人たちへの支援への思いが記されています。

耳をすませば、私たちに語りかけてくださった、あの温かな声が今でも聞こえてくるようです。

「実践記録」

中田 勉

(社会福祉法人めひの野園…本科3期)



戦後の荒廃からようやく抜け出し、朝鮮戦争の特需景気がたまたよい始めた頃、私は社大に入学した。

ようやく短大としての条件整備が整った頃で、不備を承知で、新生日本 の将来は福祉の時代であろうと希望に胸を膨ませての入学だった。

入学式前日、新聞にくるんだ布団をかついで松窓寮に荷を下ろした。大変古い寮で大部屋に6〜7人いただろう。わずか一畳程の空間を見つけ布団を敷いて寝た。夜半布団の上に雨漏りがして飛び起きた。布団

を片づけ部屋の隅で一夜を明かした。翌朝、早々に池袋の叔父の家に逃げこんだ。
当時の池袋は一面の焼野原で、木造2階建の西武デパートが駅舎で、雑司ヶ谷墓地まで見通すことができた。そんなことで池袋からの通学が始まった。



昭和37年まで続いた池袋西口の闇市



当時(昭和29年頃)の池袋
(池袋東口北側)

今、振り返ってみると当時の社

大の教授はそうそうたる方達であった。木田徹郎先生、小川政亮先生、鷲谷善教先生、谷川貞夫先生などであった。授業は比較的真面目に聴講していたと思っている。しかし、大変むずかしい話ばかりで、ケースワーク、グループワーク、コミュニティオーガニゼーション、ワーク理論など、当時としてはアメリカ直輸入学問かなと思っていた。そんな中で小川先生の社会学は興味深く聞いた。また、当時新任の垣内先生のレクリエーションは楽しい授業であった。郷里を遠く離れているので、なにかと淋しい気持ちを五味先生に甘えることで癒された。当時昼食は神宮橋の袂にあった食堂で、素うどん一杯を行列を作って食べた。腹が空くのであるべく動かないようにと明治神宮の内苑の芝生で寝ころんでいた。

社会調査とかで深川の水上生活者の実態調査も印象に残っている。ノミ、シラミがつくからといって、ズボンのすそを膝までたくし上げ

て恐る恐る川瀬を渡った。また、福祉事務所の実習は台東福祉事務所、ケース記録の書き方、訪問調査などで重田先生だったと思うが印象深く記憶に残っている。

あつと言う間の2年間で2年目に叔父の家を離れ、当時としてはめずらしい知的障害者の施設に住み込み、夜間の世話、休日の農作業の手伝いなど毎日楽しく過ごした。学校へは北浦和駅からの通学であった。



学生時代に寝ころんでいたという明治神宮内苑の芝生広場

昭和42年に第1回国際会議が南フランスのモンペリエで開催され

ということ、秋山ちえ子さんの働きかけで県から派遣された。菅先生や小林提樹先生など総勢30名位の団体で当時としては破格の出張であった。フランスへの直行便がなく北欧まわりで、ノルウェー、スウェーデン、デンマーク、オランダの順で各地の障害児(者)施設をまわり、当時日本のコロニーのモデルと言われた西ドイツのベテルの施設にたどり着いた。現地に入り日本の施設感覚では計ることができないくらい余りの広大さに驚き、特に重度でてんかん病棟を見学した。当時不思議に思ったことは北欧では大施設を解体し、国内を幾つかのブロックに分け小規模(10〜15名)の施設に切り換えているとのこと、そのうちの1箇所を見学した。10人の寮で裏にバイオリン工場があり利用者が作業をしていた。日本はなぜ大規模施設を造ろうとしているのか疑問を持ちつつベテルを見学した後、南フランスの国際会議に出席し、イギリス、イタリア、ギリシャと30日間の旅であった。



南仏の美しい風景。のちに「やねのうえのガチョウ」のモデルとなった、赤い屋根にクリーム色の建物が並ぶ

帰国後、富山での施設造りに没頭し、どうか定員350名の規模のコロニーらしきものを完成させた。当時は昭和50年初頭のオイルショックで灯油の調達・日用品の調達に振りまわされた。それよりも何よりも福祉闘争が始まり外部からのオルグに心身共に疲労の極に達し、志半ばで県に帰った。

以後、社会福祉課、婦人児童課をいきつ戻りつして、生活保護、保育所の仕事を経て、昭和54年度児童相談所に戻った。当時養護学校の義務制が施行され特殊学級に在学していた障害児が全員養護学校に入学させられた。ところが情緒障害児学級に在籍していた自閉症児も入学した。当時の教員はその取扱いも判らず、「教育の対象」でないと拒否され行き場をなくし、児童相談所の門を叩いた。児童施設に措置しようにもこれも拒否され、親からの矢のような催促で途方に暮れる日が続いた。中には待ち切れず精神病院に入院させられた児童もあり苦悩が増すばかりで、こちらが極限状態に陥り結局自分で解決の道を見つけざるを得ず、当時52才の年令を考え、また、コロニー建設の経験を生かし自分で施設を造ろうと決意した。

昭和55年暮、現在地の梨畑を手放したいという方の情報を得て買収した。約600坪の小さい農地だった。小さい建物くらいは建つだろうと翌年、県職員を退職し、

退職金を充当すべく計画を練った。昭和56年3月で退職。現地に行くとも1月の大雪で梨の枝は無残に折れ、棚の番線とからまり、その整理から作業が始まった。丁度大学を終えた長男が手伝ってくれ毎日パズルをひもどくような作業が続いた。20㎡のプレハブの小屋が最初の建物であった。約2カ月でどうにか平地にすることができた。



富山で160cmの積雪を記録した昭和56年の豪雪

そんな頃、家で手に負えない自閉症の子どもたちが訪ねてきて、日中あずかりが始まった。

今でこそ脳の中樞神経系の広汎性発達障害とか、注意欠陥多動性障害とか病状が解明されつつあるが、当時はまだ家庭環境からとかの時代で、遊戯療法が主流であった。思春期の人たちは余計いらだっていたようだが、参考になる本もなく、助言者もいない中での取り組みが始まったのである。

まったく自由のない生活を強いられていたこの子らを思う存分解放してあげればと山歩きから始めた。マスコミの取材攻勢で、またたくまに時の人となりボランティアの協力も得られるようになった。



当時日課の山歩き

午前中約6kmの山歩き、午後は陶芸や手芸など微細運動を主としての取り組みを始めた。

農地であったためいろんな制約があり、また法人格取得の手続きを合い間に取り組んだ。いずれも約1年間の期間を要した。基本財産の1億円調達には大変苦労した。昭和57年6月社会福祉法人の認可書を受理し、早速、日本船舶振興会に書類を提出した。

当時同会の理事から富山県知事に当選されたばかりの知事さんの力は相当大きかった。

私たちの施設は小高い丘の中腹にあり、前面はるかに富山湾が一望でき、晴れた日は能登半島の山々が遠望できる。その昔、万葉



建設中のうさか寮

時代越中の国守として赴任していた大伴家持が4年間過した国府跡の山も望まれる。家持が在任中巡視した折々の歌が数多く残されており、当時前面に広がる平地を「めひの野」と称していたところから当園の名前とした。JR富山駅より車で15分位の近距離にあり、北陸自動車道富山西インターより10分位で近くに富山医科薬科大学がある。近年、文教都市として発展が続いている。

開設初期より利用者の作品で資金集めのためのチャリティー茶会を催してきたが、陶芸班の作品のうち抹茶茶碗が大変不思議な縁で、当時座禅のため東京谷中の全生庵に訪れておられた中曽根総理の目にとまった。すばらしい作品だと誉めて下さり総理官邸に利用者10名と共に招かれた。翌年、選挙応援のため来られた折に、わざわざ訪問され激励して下さい。以後、未だに交流が続いている。また、



平成10年に竣工した「春の苑」

過去、社大卒業生4名を受け入れており、独立した人もいます。また近隣の福祉系大学の実習施設、社大の指定も受けており数多くの実習生が訪れている。



昭和60年、首相官邸を訪問

森繁久弥さんの「あゆみの箱」とも交流があり著名な芸能人が園祭に参加されるなど人との交流も大切にしている。



春の苑から一望できる富山平野。大伴家持の歌では「めひの野」と称され、めひの野園の名の由来となっている

今後は、利用者と共に、常に選択される施設づくりを目指し、日々新たな心で研鑽を積み重ねていきたいと念じている。

やねのうえのガチョウ



12月3日（土）、クアトロブーム小杉で、ボウリングとカラオケを楽しみました。カラオケは個性溢れる選曲で盛り上がり、ボウリングではストライクが出るとハイタッチをして喜びました。

その後ココスで夕食を食べて、日頃の労をねぎらいました。

春の苑



春の苑では、12月1日にクリスマス会&忘年会を行いました。オードブルやケーキ、「やねのうえのガチョウ」のピザとサンドイッチをみんなで食べました。最後はサンタがプレゼントを持って登場し、楽しい時間を過ごしました。

ウォーム・ワークやぶなみ



利用者のコメント

今年もクリスマスツリーを囲んで、利用者や職員、みんなの顔が見渡せる中でクリスマス会が始まりました。

お寿司やオードブル、ケーキをお腹いっぱい食べ、何よりもこうしてみんなの笑顔が見られる中で楽しく食事ができたことをうれしく思いました。（川口さん）

みしまの工房



みしまの工房では、12月8日にクリスマス会を行いました。会場の呉羽ハイツでは、ピザやハンバーグなど、みんなが大好きなメニューをいただきました。カラオケを楽しんだ後は、デザートケーキを食べ、大満足のひとときを過ごしました。

作業センターふじなみ



12月6日（火）作業センターふじなみで忘年会を行いました。地域の店から料理を取り寄せ、おいしい食事とカラオケを楽しみました。

利用者のコメント

おいしい料理を食べて大好きなカラオケができて楽しかったです。（八木さん）

「NHK歳末たすけあい」は、共同募金会を通じて国内の福祉施設や支援を必要とする方々のために役立てられます。



うさか寮「レイコップ」設置

この度「北日本放送社会福祉事業基金」より、布団クリーナー・レイコップを5台贈呈していただきました。レイコップだけの特許技術「光クリンメカニズム」により、3分間で90%以上のハウスタストを除去できます。うさか寮の各棟に配置され、利用者がより心地よく睡眠を取れるようになりました。ここに整備の報告を申し上げるとともに、感謝の意を表します。

後援会名簿

(H28.11.18～H29.2.14) 敬称略

鍋島 朋子 下新川郡
酒井 孝 中新川郡
高島 三喜男 射水市
沖村 勲 富山市

後援会振込口座番号
北陸銀行五福支店 店番号140
普通預金4250590
めひの野園後援会

ご寄付ありがとうございました。

(H28.11.21～H29.1.30) 敬称略

第19回全国農業担い手サミット
inぎふ実行委員会

富山大学
佐藤理容院
増田 羊子
今井 哲治
廣田 美千代
めひの野園保護者会
富山国際大学
(福)富山県社会福祉協議会
石橋 孝史
大門 信吾
長井 悦子
富山県立南砺福野高等学校
麦谷 和夫
富山情報ビジネス専門学校

寄付金振込口座番号
北陸銀行五福支店 店番号140
普通預金4041542
社会福祉法人 めひの野園

来訪者

(H28.11.16～H29.1.30) 敬称略

富山市議会議員 たかた まり
(株)ギア 中井 康博
(株)鈴木一級建築士事務所 酒井 武志
鈴木工業(株) 長澤 真志
大和リース(株) 山越 大志
有田 泰二・坂東 洋輔
日本海建興(株) 柏谷 昌浩
北陸総合警備保障(株) 小瀬 重光
千田 英雄
遠田 幸則
富山県厚生部障害福祉課 栗林 尚美
富けやきの郷ワークセンター 高橋 通泰
(医)親貴会児童発達支援センター 田元 清香
福滝乃川学園 高崎 清香
(株)サンジエット 乗舟 秀樹
(株)グアイドードリント 北陸 広田 聡
(福)富山県社会福祉総合センター 西村 次男・井波 博典
林建設(株) 奥田 比都司
東洋ゴム北陸販売(株) 谷村 正人
富山家庭裁判所 桑村 由己
杉本 由可子・稲吉 史生
富山市議会議員 浮田 雅夫
(株)鈴木一級建築士事務所 鈴木 保二・金山 泰夫
(株)北日本新聞社 江端 雄也・佐藤 根正
中央管機カクユー(株) 花田 千恵
富山テレビ放送 KDDI(株) 近藤 益樹
富山セレマ富山第二支社 秋本 翔太
KDDI(株) 木山 沙也香
(株)オールエイティ 吉野 正三
(有)ビュア・ハウジング 吉野 壽秀
北陸銀行丸の内支店 根建 義匠
西金屋自治会 高山 清志

編集後記

35年前、当園の第一歩は、オヤジさんが私財を投じて購入された梨畑を、息子である中田匡現理事長とともに整地することから始まった。その後、毎年のように日中活動の場やグループホームなどを整備し、めひの野園という木は枝葉を広げていった。今では、その木の下に利用者200余名、その保護者や職員を合わせると500名を超える人々が集う場所となっている。

オヤジさんの背中を見つめ、ともに歩んで来た現理事長。時には施設整備に必要な資金調達や助成金申請のためにオヤジさんとともに奔走したことなどを懐かしむ今日この頃。オヤジさんが入院していた2年半の間、足しげく病院に通い、利用者や園の様子を報告し、意見を求めた。苦楽を共にし、そして師と仰ぐオヤジさんへの畏敬の念からであろう。

「めひの野園はお前に任せた」という思いで、眠るように安らかに旅立たれたオヤジさん。現理事長とともに我々職員も利用者一人ひとりを見つめ、彼らによりよい支援を施さなければならぬ。遠くからご覧になっているオヤジさんに、あの優しい微笑みで「うん、うん」と頷いてもらえるように。

(岡部記)